琉球大学学術リポジトリ

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究：ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ハワイ, アメリカ合衆国本土, カナダ, 沖縄県出身移民, 面接聞取調査 キーワード (En): 作成者: 石川, 友紀, Ishikawa, Tomonori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010099

移民研究 第 10 号　2015　43-68

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究
－ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅱ）－

石 川 友 紀

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ハワイ一世移民の現地調査証言の事例（前号よりつづく）
Ⅲ．アメリカ合衆国本土・カナダにおける県系移民の現地調査（1993 年）
Ⅳ．北米県系移民現地調査における主な収集資料

キーワード：ハワイ，アメリカ合衆国本土，カナダ，沖縄県出身移民，面接聞取調査

Ⅰ．はじめに

グローバル化時代の今日，かつて世界に雄飛した沖縄県出身移民に関する地理学的研究はもっとあってもよさそうであるが，現実は必ずしもそうではない。県から海外へ出た移民は 110 年余の歴史をもち，6 世まで出生し，今や約 40 万人の県系移民が世界の各地に在住していると言われている。なかでも，移民一世は二世また三世等のルーツとして重要な位置を占める。一世移民の存在意義は大きい。そのため，海外在住の県系移民の現地調査を行い，一世移民の証言記録を残しておく必要がある。これまで「移民県」沖縄にあっては, 1990 年代以降各市町村において, 市町村史誌の中で「移民･出稼ぎ」編を刊行してきた。すでに沖縄本島 14 市町村でその成果が現れ，現在進行中の市町村史誌もみられる [1)]。

本稿では本冊の前号（『移民研究』第 9 号）で発表した文部省科学研究費補助金による「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究 ― ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅰ）―」にひきつづき，同テーマの（Ⅱ）として，北米のハワイ・アメリカ合衆国本土･カナダにおける県系移民の現地調査の状況を取り上げる [2)]。なお，本研究プロジェクトとの関連論文として石丸哲史 (2003)「アメリカ合衆国における沖縄県出身移住者に関する地理学的検討」『沖縄地理』第 6 号も参考となる。

Ⅱ．ハワイ一世移民の現地調査証言の事例（前号よりつづく）

(1) 幸地千代子（旧姓オミト）

1903 年（明治 36 年）11 月 1 日生。オアフ島ホノルル市で 1992 年 9 月 17 日に面接聞取。調査時 88 歳。首里市赤平町出身。父翁長助之･母マカトの長女。夫幸地朝則は尚家系の孫。首里城下にあった首里女子工芸学校を卒業した。

1919 年（大正 8）12 月 15 歳のとき，すでにハワイに移民していた父の呼び寄せで，母と弟と 3 人日本丸でホノルル港に着いた。

渡航後，1919 年から約 2 年間マウイ島ワイルクキャンプで，白人の家庭奉公人として働いた。1921 年同島ハイク耕地へ移り，パイナップルの缶詰工場で働いた。賃金は一時間 10 セントであった。1922 年ごろマウイ島ワイルクへ戻り，約 2 年間父の兄弟が経営するサトウキビ耕地で働いた。1924 年ごろマウイ島カフルイに移り，約 20 年間夫は大西商会に勤めた。戦後 1950 年ごろオアフ島ホノルル市に出てきて，子供が成長し働くようになったので隠居の身となった。移民当時から永住のつもりであった。1955 年にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 2 人，女性が 2 人で計 4 人である。子供は男性が 2 人，女性が 6 人で計 8 人である。現在 1 人でマンションに住んでいるが，階違いに娘も住んでいて，面倒をみてもらっている。

仏壇はないが，墓はヌアヌ地区にある。宗教はキリスト教のプロテスタントである。家庭での言語はすべて日本語を使用してきた。沖縄料理はよく作り，ユシドーフやサーターアンダギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』や『ハワイパシフィックプレス』を購読している。情報源としては日本語によるラジオを聞き，テレビを観る。同郷人団体としては首里クラブと同婦人会に所属する。ラナキラクラブと豊寿の会の会員である。

模合は参加したことがない。銀行はよく利用する。送金は戦前何回か行ったことがある。郷里への一時帰国は夫は 4，5 回あるが，私はいまだ帰郷したことがない。

(2) 糸満盛悦（いとみつ・せいえつ）

1902 年（明治 35）9 月 30 日生。オアフ島ホノルル市で 1992 年 9 月 17 日に面接聞取。調査時 89 歳。首里市汀良町出身。父糸満盛敦の 2 男，県立師範附属小学校を卒業し，高等科 2 年を修了。県立第一中学校へ進学し，2 年生のときに中退した。

1920 年（大正 9）10 月 18 歳のとき，すでにハワイに移民していた父の呼び寄せで，母と弟と 3 人春洋丸でホノルル港に着いた。外務省の「海外旅券下付表」によると，糸満盛悦は那覇区上泉町の 2 丁目 20 番地に本籍のある盛輔弟盛敦 2 男で，18 歳 1 ヵ月のときハワイへ父の呼び寄せとして，大正 9 年 9 月 8 日に旅券が下付されている [3)]。同様弟盛敦 3 男盛喜も 15 歳 11 ヵ月で，父の呼び寄せで同日旅券が下付されている。

渡航後，1920 年オアフ島ホノルル市ヌアヌ地区で，ミッドフィックスクールに通い，英語の勉強をした。1925 年ホノルル市パワーのパイナップル工場で働いた。そのときの時給は 20 セントであった。1926 年同市ククイストリートに移り，ハウスボーイ（家庭奉公人）の仕事をした。月給は 75 ドルであった。

1941 年ごろホノルル市のタイムススーパーの近くで，貸家として古いハウスを買い取り，アパート経営をした。1967 年以後カイムキセロパホアで，子供が事務所をもったので，その後隠居の生活をしている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが，戦後子供が成長したので，永住の決意をし，アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性のみの 3 人である。子供は男性が 2 人，女性が 5 人で計 7 人である。孫が 13 人，ひ孫が 9 人いる。家屋・宅地は自己所有で，アパートの貸家を一軒もっている。墓地はヌアヌ地区にあり，本願寺に所属する。家庭での言語は親子は英語で話すが，夫婦や家族の会話はすべて日本語である。沖縄料理は長男嫁がよく作るが，クーブイリチーが好物である。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。英字新聞の『スターブリテン』も読む。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。所属する団体はハワイ年長者クラブとカイムキ老人クラブである。

模合は毎月 1 回参加し，銀行も利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行ったことがある。沖縄への戦災救援運動の際にはお金を寄付した。郷里への一時帰国は 1960 年，83 年を含めて 4 回ある。

(3) 島福カメ（旧姓島袋）

1901 年（明治 34）9 月 8 日生。オアフ島ホノルル市で 1922 年 9 月 17 日に面接聞取。調査時 91 歳。美里村字比屋根出身。父島袋蒲・母ナベの 2 女。美東尋常高等小学校を卒業し，卒業後家業のサトウキビ作りなどの農業の手伝いをしていた。

1920 年（大正 9）19 歳の時，ハワイへ移民していた兄宮里亀の呼び寄せで，サイベリア号で出航し，ホノルル港に着いた。

渡航後，1920 年兄のいるマウイ島プネネのサトウキビ耕地で働いた。サトウキビを 6 本束ねにするパイラメンの仕事であった。1922 年同島カフク耕地へ移り，サトウキビ耕地で約 6 年間働いた。1928 年オアフ島ホノルル市モイリリーに移り，10 年余パイナップル工場の従業員となった。

太平洋戦争中 49 日間仕事ができなくなり，1945 年 2 月 11 日に，神様のお使いとして天からのお告げがあった。祖先をたどると，祖母はヌール（ノロ・神女）であった。以後現在までここホノルル市アヘコロ街 2559 番地でユタの仕事をしている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが，現在は永住を決意し，アメリカの国籍を取得している。

兄弟姉妹は男性が 1 人，女性が 2 人で計 3 人である。子供は女性のみの 5 人である。孫が 11 人，ひ孫が 3 人いる。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はないが，ユタ関係の飾り物や書物がある。宗教はユタである。家庭での言語は夫婦・親子は沖縄方言と日本語を併用し，家族の場合は日本語を話す。沖縄料理はよく作り，ヨモギやジューシーメーが好

きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。英字新聞は読まない。ラジオも聞かず，テレビも観ない。同郷人の団体としては，沖縄県人連合会と「がじゅまる会」に所属している。

模合はかつて参加したことはある。銀行はよく利用する。郷里への送金は戦前したことはあるが，戦後はない。終戦直後，沖縄へ戦災救援物資を送った。一時帰国は何回かある。

(4) 安里常琉

1906 年（明治 39）8 月 5 日生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日に面接聞取。調査時 86 歳。中城村字喜舎場出身。父安里常栄・母カマの長男，妻は二世で仲村昇の妹（大正 4 年生)。喜舎場尋常高等小学校を卒業，高等科 2 年を修了した。卒業後，4 歳の時に父が亡くなったので，サトウキビ･サツマイモ･米を栽培していた農家の母の手伝いをしていた。

1924 年（大正 13）徴兵前の 18 歳の時，ハワイに移民していたおじの安里常吉の養子として，単身ハワイへ渡航した。

渡航後，1924 年マウイ島カフルイでおじの安里喜永宅で約 3 週間滞在した。次いで同島パイヤのカヘカキャンプのおじ安里常吉のところで，約 1 ヵ月間独身者のための弁当作りのコックの仕事をした。その後 3 年間同地でコンパンというサトウキビ請負業の仕事をした。1927 年ごろマウイ島パイヤのハレポーロイン会社，ついでシュガーミール会社で働いた。最後はマウイ島カフルイのサトウキビ工場で 32 年間働いた。移民当時は出稼ぎのつもりであったが，1957 年にアメリカ国籍を取得し，現在永住の決意である。

兄弟姉妹は男性が 2 人，女性が 1 人で計 3 人である。孫が 1 人，ひ孫が 1 人いる。同居家族は妻との 2 人である。家屋・宅地は自己所有で，仏壇と墓もある。宗教は仏教で臨済宗である。家庭での言語は夫婦は日本語と沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理をよく作り，ラフテー・アシテビチ・ゴーヤーが好きで，ポーク缶詰もよく利用する。

邦字新聞は『ハワイ報知』『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジオを聞き，テレビは英語・日本語のものを観る。日本語のビデオもよく観る。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。

模合は月一回一口 25 ドルのものに参加している。銀行もよく利用する。郷里への送金は戦前 80 円送った。戦後は沖縄への戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は 1954 年母の米寿の祝いのときを含めて 6 回ある。

(5) 仲宗根真章

1907 年（明治 40）4 月 20 日生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日面接聞取。調査

時 85 歳。具志川村字安慶名 82 番地出身。父仲宗根仁一・母カマの長男。妻マツ（明治 43 年生）はハワイ二世。具志川尋常高等小学校を卒業し，高等科 2 年を修了する。卒業後 1 年間祖父の農業の手伝いをしていた。戦前サトウキビ畑が約 2,000 坪もあり，住宅は瓦ぶきで，裕福な家庭であった。

1923 年（大正 12）3 月 4 日 16 歳の時，父の呼び寄せで母と 2 人ハワイへ渡航した。徳田移民会社の斡旋により那覇港を出航し，神戸までいった。神戸での身体検査では 12 指腸虫の検査などで 1 週間も滞在した。大洋丸でハワイのホノルル港に到着した。ホノルルの移民局での検査は無事パスした。そのときの通訳官は田島朝明氏（首里市出身）であった。

渡航後，1923 年 2 ヵ月間マウイ島カハナキャンプのサトウキビ耕地で，父と共に労働者として働いた。その仕事とは 18 ～ 20 ヵ所の広大なサトウキビ畑に水をかけることで，賃金は一日 1 ドルであった。その後同島ラハイナのホノカワキャンプのサトウキビ畑で 18 年間働いた。朝 4 時起床，朝食を済ませ，弁当を持って 5 時に馬で耕地へ向かった。夕食など食事はうどんや汁物・野菜がでて，牛肉や豚肉もあったが高価であった。

1941 年マウイ島パイアのカイルアキャンプのサトウキビ耕地でウチナーンチュと一緒に，キビの請負いの仕事をした。戦後もカイルアのサトウキビ耕地で働き，併せて 22 年間もその地にいた。その後，同島カフルイのサトウキビ会社で 29 年間働いた。賃金は一日 1 ドル 80 セントに上昇していた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，子供ができて 1931 年ごろから永住の決意をした。1978 年ごろにアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 1 人，女性が 2 人で計 3 人である。子供は男性が 3 人，女性が 1 人で計 4 人である。孫が 12 人，ひ孫が 1 人いる。現在同居家族は 2 人である。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇・墓地はない。宗教は仏教の浄土宗で，ワイルク浄土寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し , 親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り，ゴーヤーチャンプルー・トーフウブサー・アシティビチが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。ラジオとテレビは日本語と英語の両言語のものを, 聞いたり観たりしている。日本語の雑誌を読み, ビデオを観る。

模合は参加していない。銀行はよく利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦後 1957 年を皮切りに，1990 年ごろまで合計 7 回ある。

（6）又吉松

1896 年（明治 29）11 月 26 日生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日に面接聞取。調査時 95 歳。浦添村字仲間 231 番地出身。父又吉武忠・母カマの 2 男。妻ツルはハワイ二世で父は同郷の島袋賀真。浦添尋常高等小学校を卒業し，高等科 2 年を修了した。

1911 年（明治 44）15 歳の時，父の呼び寄せで，単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，又吉松は浦添村字仲間 231 番地に本籍のある戸主武中の二男で，14 歳 8 ヵ月の時，ハワイへ父の呼び寄せとして，明治 44 年 6 月 17 日に旅券が下付されている[4)]。那覇から神戸を経由，サイベリア号で横浜を出航し，ホノルル港へ到着した。港には父がおばと一緒に迎えに来てくれた。

渡航後，最初の 1 ヵ月間はオアフ島ワイパフのサトウキビ耕地で働いた。ついで，ハワイ島ホノム耕地三番のサトウキビ耕地で 6 年間働いた。その後，同島ペペケオのサトウキビ耕地で 1 ヵ月間仕事をした。同地で友人が食料品を経営していた丸山商店で，その店員を 1 年間勤めた。

今度はカウアイ島へ移り，2 年半肉屋のドライバーをした。その後，オアフ島ホノルル市ハウラで 7 ヵ月間，ホノルル鉄道コンパニーの鉄道工夫として働いた。賃金は一日 2 ドル 25 セントであったと記憶している。マウイ島カフクの上へ移り，沖縄県人が経営しているパイナップル工場で働いた。その後，モロカイ島へ移り，3 ヵ月間トンネル掘りの仕事をした。賃金は一日 3 ドル 50 セントであった。そこをやめ，ラナイ島のパイナップル耕地で働いた。賃金は一日 3 ドル 10 セントであった。1925 年から 26 年にかけて約 1 ヵ月間沖縄へ帰った。その間に日本本土の観光地で，東京の二重橋や大阪城などを見学した。再渡航後，マウイ島へ移り，石工として石割りの仕事をした。移民した当時は 4，5 年で帰国するつもりであったが，子供の成長とともに永住を決意した。1958 年アメリカ国籍を取得す。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 4 人で計 7 人である。子供は男性が 3 人，女性が 3 人で計 6 人である。孫は 12 人，ひ孫は 8 人いる。現在同居家族は 3 人である。家屋・住宅は自己所有である。仏壇も墓地もない。宗教は仏教で浄土宗を信仰している。家庭での言語は妻とは日本語を話し，親子・家族は英語を使用する。沖縄料理はよく作り，トーフ・アシティビチが好きである。

邦字新聞は購読していない。ラジオも聞かず，テレビも観ない。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。模合は参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前行ったことがある。郷里への一時帰国は 1973 年を含めて合計 2 回ある。

（7）比嘉チヨノ

1904 年（明治 37）12 月 19 日生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日に面接聞取。調査時 87 歳。中城村喜舎場出身。父安座間ようほう・母カマドの 2 女。夫比嘉昌栄。喜舎場尋常高等小学校を卒業し，補習科 2 年を修了した。

1923 年（大正 12）5 月 21 日 18 歳の時，夫の呼び寄せでハワイへ渡航した。そのルートは写真結婚の形式で，ハワイ移民の夫から手紙をもらい移民の手続きをし，那覇港を出

航，神戸に滞在したのち，同行者 8 人とともに大洋丸でホノルル港に着いた。

渡航後，1923 年マウイ島カイルアのサトウキビ耕地で 8 年間働いた。また，夫婦でコックとしても働き，お金を貯めた。1931 年頃同島クラに移り，3 年間パイナップル耕地で働いた。その後マウイ島パイヤのサトウキビ工場へ移り，戦争中まで働いた。

戦後 1946 年マウイ島カフルイで 8 年間，比嘉トーフ屋を経営し，トーフ作りをした。1955 年以後はトーフ屋とともに，豚 11，12 頭を飼う養豚業も行った。アメリカ国籍を取得したが，その年月日は覚えていない。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 2 人で計 5 人である。子供は同じく男性が 3 人，女性が 2 人で計 5 人である。孫が 15 人，ひ孫が 14 人いる。同居家族はなく，現在一人暮らしである。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇も墓地もある。墓地は公的機関のボックス式で，メモリアルデイに墓参りをする。宗教はパプテストでユニオンチャーチで礼拝する。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り，コンブ・ゴーヤーを使い，アンダギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き，テレビを観，雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。以前は喜舎場・仲順などの中城村人の集会もあった。

模合は友達同士で親睦のため，月一回参加している。銀行も利用する。郷里へ送金したことはない。戦後は沖縄へ戦災救援物資として，米・油など食料品を送った。郷里への一時帰国は戦後で，1952 年・79 年を含めて合計 3 回ある。

（8）山城ゴセ

1899 年（明治 32）生。マウイ島カフルイで 1992 年 9 月 19 日面接聞取。調査時 93 歳。糸満町字糸満出身。父宮城蒲・母ゴゼイの長女。夫山城蒲は高嶺村字大里出身。糸満尋常高等小学校を卒業した。卒業後郷里で母に見慣って魚売りの行商をした。実家は畑があり，サツマイモ・野菜作りをし，山羊も飼っていた。

1916 年（大正 5）16 歳の時，父の呼寄せで単身ハワイへ渡航した。長男兄もハワイへ移民していた。父はその後帰国した。

渡航後，1916 年マウイ島のハイクやウルマル耕地のパイナップル畑で 1 年間働いた。1917 年頃, オアフ島ホノルル市のヌアヌ地区の山手へ移り , 3 年間白人のハウスメイド（家庭奉仕人）の仕事をした。夫もそこでヤードボーイをしていた。その後，ホノルル市でレストランを経営した。

戦前マウイ島プネネに移り，サトウキビ耕地で働いていたが，1 年後に太平洋戦争が勃発した。1970 年ごろからマウイ島カフルイに移り住み現在に至っている。移民当時は出稼ぎのつもりであったが，18 歳で結婚して後は永住の決意をした。一世で日本国籍のま

までである。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 5 人で計 8 人である。子供は男性が 5 人，女性が 1 人で計 6 人である。孫は 9 人，ひ孫は 1 人いる。同居家族は 2 人である。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。宗教は仏教で，パイヤにある臨済宗のお寺の信徒である。家庭での言語はすべて日本語を使用している。沖縄料理は時々作っていた。魚料理が好きである。

邦字新聞は購読しない。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に属する。模合には参加していない。銀行は利用する。戦前，戦後も郷里へ送金したことはない。戦後沖縄へ戦災救援物資として，食料・衣類を送った。郷里への一時帰国は，戦後 1952 年が最初で，合計 2 回ある。

(9) 比嘉ウシ

1900 年（明治 33）8 月 10 日生。マウイ島ワイルクで面接聞取。調査時 92 歳。中城村字島袋出身。父比嘉松・母マツヨの長女。夫は 10 歳年上の比嘉太郎（タルー）。那覇市尋常高等小学校を 4 年生で中退し, のち喜舎場尋常高等小学校を卒業した。実家は農業であった。

1918 年（大正 7）18 歳のとき，ハワイ移民のおじの呼び寄せで，再渡航の父と 2 人でハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，比嘉ウシは中城村字島袋 480 番地に本籍のある戸主亀助弟松の長女で, 18 歳のときハワイへ, 父（45 歳 11 ヵ月で再渡航），母マツヨ（47 歳 3 ヵ月）と 3 人の旅券が大正 7 年 5 月 7 日に下付されている [5)]。那覇港を出航し，神戸を経由して約 1 週間でホノルル港に着いたが，渡航の船名は忘れた。ホノルルの移民検査所では 2 日間いたが，父と娘の身分であったが，氏名は番号で呼ばれた。

渡航後，1918 年マウイ島ワイルクのサトウキビプランテーションで働いた。キビ畑で草取りや水かけの仕事であった。午前 5 時起床，朝食は沖縄的な味噌汁，野菜のウブサーですませ，6 時に耕地へ向かった。昼食は 11 時 30 分に米やおかずの弁当ですませ，午後 4 時には住宅へ帰った。その後，マウイ島ワイアラのサトウキビプランテーションで 10 年間働いた。再びワイルクのサトウキビプランテーションへ戻り仕事をした。移民当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住を決意し，アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は女性のみの 2 人である。子供は男性が 6 人，女性が 3 人で計 9 人である。孫は 10 人いる。同居家族は 5 人である。家屋・宅地は自己所有である。仏壇はあり，墓地もワイルクに個人墓がある。宗教は仏教で，ワイルクの浄土宗の本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し，親子・家族は日本語と沖縄方言を併用している。沖縄料理はよく作り，ウンブサー・アシティビチスープが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジ

オを聞き，テレビを観，雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会と，約 20 年前に創設されたハワイ二世の与那原良永・ロイ氏が会長を務める琉球文化クラブに所属する。

模合は子供たちの名義になっているが，親睦のため月一回参加している。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送ったことがある。郷里への一時帰国は戦前 1 回，戦後 1 回合計 2 回ある。

（10）沢岻安義

1902 年（明治 35）6 月 3 日生。マウイ島ハイクで 1992 年 9 月 20 日面接。調査時 90 歳。北谷村字野国 641 番地出身。父沢岻安厚・母マカトの 2 男。妻カマド（旧姓久場，越来村出身一世，2 歳年下）。屋良尋常高等小学校を卒業した。卒業後 4，5 年間実家の農業の手伝いをした。現在米軍の嘉手納飛行場になっているが，サトウキビとサツマイモの畑があり，家屋はカヤブキであった。土地は肥沃であった。

1919 年（大正 8）12 月 25 日 17 歳のとき，父安厚の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，沢岻安義は北谷村字野国 641 番地に本籍のある戸主安厚の 2 男で，17 歳 5 ヵ月のときハワイへ父の呼び寄せで，大正 8 年 12 月 24 日に旅券が下付されている [6)]。那覇港から船で鹿児島へ着き，汽車で神戸へ行き，そこで約 1 ヵ月間も滞在した。やっと 12 指腸虫検査も通過し, 天洋丸 (大洋丸か) でハワイへ向かった。ホノルル港到着時は父が迎えに来て，上里旅館で 2 泊した。

渡航後，1919 年マウイ島プネネ十三番キャンプで働いた。1920 年同島ハイクのウルマルのパイナップル耕地で約 3 年間働いた。その土地は親戚の沢岻氏の個人所有のパイナップル畑であり，仕事は除草やパイナップルもぎをした。一日の生活は，米と味噌汁の朝食をすませ，6 時に耕地へ出発，午前中の仕事をし，12 時に米・味噌汁・うどんの昼食をとった。午後 2 時にコーヒータイムがあり，6 時には耕地を後にした。当時，沖縄では 3 食ともサツマイモで，正月に米を食べる程度であったが，ハワイでは毎日米が食べれた。

1923 年マウイ島ワイルクのサトウキビ工場で働いた。賃金は日給 1 ドルで，超勤手当ては一時間 10 セントであった。1935 年同島ハイクでサトウキビ栽培の請負いの仕事をした。また，サトウキビやパイナップルのトラック運搬の仕事もした。サトウキビの工場は戦後 1963 年に閉鎖された。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，戦後永住を決意した。1952 年 50 歳の時にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 1 人で計 4 人である。子供は男性が 3 人，女性が 4 人で計 7 人である。孫は 20 人，ひ孫は 16 人いる。家屋・宅地共に自己所有である。不動産として約 7,000 坪の土地を所有している。仏壇があり，墓はワイルクに購入した。宗教は仏教で臨済宗の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理は娘たちがよく作り，アシティビチが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読する。日本語のラジオを聞き，テレビを観，雑誌を読む。同郷人団体はマウイ沖縄県人会に所属する。老人クラブもあり，毎週（火）（木）の 8 時 30 分から 12 時まで集会があり，食事もでる。

模合は親睦のため, 月一回 14, 15 人で集まり, 10 ドルから 20 ドルのものに参加している。銀行も利用する。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦後 1951 年，1959 年か 60 年頃を含めて 3 回ある。

(11) 安里カナ（旧姓知念）

1901 年(明治 34)6 月 10 日生。マウイ島ハイクで 1992 年 9 月 20 日面接聞取。調査時 91 歳。美里村字古謝 64 番地出身。父知念武戸･母カメの 2 女。夫安里永久は中城村字喜舎場出身。美里尋常高等小学校を卒業す。卒業後実家で農業の手伝いをしていた。畑があり，サトウキビを栽培していた。

1916 年（大正 5）8 月 16 日と記憶しているが，15 歳のとき父の呼び寄せで，弟の知念精吉と 2 人で沖縄を出発してハワイへ向かった。外務省の「海外旅券下付表」によると，知念カナは美里村字古謝 64 番地に本籍のある戸主知念武戸の 2 女として，父の呼び寄せで米領布哇（ハワイ）へ 15 歳 4 ヵ月で，大正 5 年 10 月 5 日に旅券が下付されている。また弟の知念精吉は姉のカナ同様，戸主武戸長男として，父の呼び寄せでハワイへ 12 歳 1 ヵ月で同日旅券が下付されている [7)]。渡航船は大洋丸かサイベリア号であった。

渡航後，1916 年父のいるマウイ島ワイアユアのサトウキビ耕地で働いた。18 歳のとき同島チーファのサトウキビ耕地へ移った。1920 年 19 歳の時に安里永久と結婚し，マウイ島ハイクのサトウキビ耕地へ移り，以後同地に住み続けている。74 歳まで現役で働いた。サトウキビプランテーションの仕事は，耕地までトラックで運ばれ，送り迎えの便があった。朝 6 時には朝食をすませ，トラックに乗り込み耕地へ向かった。サトウキビ畑の仕事をし，夕方 5 時頃には帰宅した。夕食は 7 時頃でごはんとおかずで，主食は米であった。風呂に入ったりして 9 時頃には就寝した。子育てと併せて女性の仕事が多かった。移民当時から永住のつもりであった。1952 年頃アメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 1 人，女性が 2 人で計 3 人である。子供は男性が 5 人，女性が 3 人で計 8 人である。孫が 22 人，ひ孫が 8 人いる。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。墓地はマカワオに個人墓を購入した。宗教はキリスト教でプロテスタントである。家庭での言語はすべて日本語である。沖縄料理をよく作り，アシティビチ・牛肉・魚・トーフ・ゴーヤーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』を購読している。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。所属団体は約 20 人の会員がいるペンクラブに入っている。月 2 回お弁当会の集会がある。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない。送金は戦前父母が帰国して

いたので郷里へ送った。戦後も正月・7 月には 20，30 ドルを送った。戦後は郷里へ戦災救援物資の小包を 2 回送った。郷里への一時帰国は戦後夫と一緒に 1 回ある。

（12）比嘉ツル（チル）

1895 年（明治 28）5 月 12 日生。ハワイ島ヒロ市で 1992 年 9 月 22 日に面接聞取。調査時 97 歳。越来村字古謝出身。父仲本朝光・母ツルの長女。夫比嘉真勢は明治 18 年 5 月 10 日生で，父松仙・母ウトの 2 男である。教育歴はなし。本人のパスポートによると，比嘉ツルは 1912 年（大正元）9 月 17 日の旅券下付で，17 歳 4 ヵ月のときの夫の呼び寄せで，ハワイへ渡航したことになっている。外務省の「海外旅券下付表」によると，比嘉チルは越来村字宇久田 572 番地に本籍のある非戸主眞勢妻で，夫の呼び寄せとしてハワイへ 17 歳 4 ヵ月のとき, 大正元年 9 月 18 日に旅券が下付されている[8)]。横浜港から出航したが，船名は覚えていない。

渡航後，1912 年ハワイ島ヒロから 6 マイル離れて，夫が働いていたワイケウカの耕地のサトウキビ畑と工場で働いた。その後ハワイ島でトーフ作りの仕事をしていた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住を決意した。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 3 人である。子供は男性が 5 人，女性が 3 人で計 8 人である。孫は 27 人, ひ孫は 32 人, やしゃごは 2 人いる。現在ヒロ市の老人病院に世話になっている。家屋・宅地ともに自己所有である。仏壇はないが，墓地はある。宗教はキリスト教でパプテストである。家庭での言語は夫婦は沖縄方言を話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理は 88 歳の米寿のころまではよく作っていた。チャンプルー・ゴーヤー・アシティビチ・アンダギー・サツマイモが好きである。

邦字新聞は購読していない。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。同郷人団体はフイオキナワ（ハワイ島の沖縄県人会）に所属する。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない・郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後オキナワへ救援物資としての食料品などを送ったことがある。郷里への一時帰国は 5 回ある。

（13）島袋ウタ

1903 年（明治 36）10 月 6 日生。ハワイ島ヒロ市で 1992 年 9 月 23 日に面接聞取。調査時 88 歳。具志川村字安慶名 8 番地出身。夫島袋長太（田）。平良川尋常高等小学校を卒業。卒業後実家の農業の手伝いをしていた。サトウキビ畑が広がり, 家屋はカヤブキであった。交通は安慶名から那覇までは自動車や客馬車が通っていた。

1924 年（大正 13）6 月 22 日 20 歳のときに夫とともに，最後の呼び寄せ移民として，

ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，島袋ウタは中頭郡具志川字安慶名 8 番地に本籍のある戸主島袋茂太（40 歳 4 ヵ月，再渡航）の妻で，20 歳 8 ヵ月のとき夫と同行としてハワイへ大正 13 年 6 月 11 日に旅券が下付されている[9)]。横浜港からコレア号で出航したが，乗船者には沖縄県出身移民も多かった。ハワイ到着後はホノルルの移民局では，3 日間も目と十二指腸虫病の検査で滞在させられた。

渡航後, 1924 年ハワイ島九回船耕地のアマウルキャンプ №4 のサトウキビ耕地で働いた。同耕地で 1941 年の太平洋戦争勃発時まで働いた。その後，九回船耕地のワイナクキャンプへ移動し，1957 年までサトウキビ耕地での仕事に従事した。キビ耕地の仕事はサトウキビ畑の草取り（ホーハナ），葉をむしる（ホレホレ），茎を切る（カチケン），茎をかつぐ（ハッパイコウ）であった。賃金は日給で 75 セントであった。耕地へ朝 6 時に出発し，11 時になるとアルミ製の弁当箱にもってきたごはんとトーフなどのおかずで昼食をとった。午後キビ畑で働き，子供も居たので 3 時には住居に帰った。その後夕食の支度や洗濯などをして，7 時から 8 時の間に，ごはん（米）と肉・豆・野菜のおかずやおつゆで夕食をとった。後片付けをして，子供の世話をし，就寝は 11 時ごろであった。毎日そのような生活の繰り返しであった。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住の決意をした。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 3 人で計 6 人である。子供は男性が 3 人，女性が 5 人で計 8 人である。孫は 17 人，ひ孫は 12 人いる。同居家族は 4 人である。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇も墓地もある。墓は郡政府の共同墓地のアライにある。宗教は仏教で，浄土真宗のヒロ本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り，トーフやカンダバー（サツマイモの茎や葉）ジューシーが好きである。老人の集まりにはよくアシティビチがでる。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。同郷人団体はフイオキナワ（ハワイ島沖縄県人会）に所属する。80 歳以上の老人からは会費を徴収しない。趣味のクラブもあり，（火）（木）と週 2 回集会に通っている。

模合は月一回 10 ドルのものに参加している。銀行も利用する。郷里への送金は戦前・戦後とも行ったことがない。戦後沖縄へ戦災救援物資を送った。郷里への一時帰国は戦前渡航 3 年後の 1927 年に 1 回，戦後は 1989 年を含めて 8 回ある。

（14）前武當ゴゼイ（めーんとう・ごぜい）

1895 年（明治 28）8 月 4 日生。ハワイ島ヒロ市で 1992 年 9 月 23 日に面接聞取。調査時 97 歳。与那城村字平安座 1180 番地出身。父前武當政喜・母 ○○ の 2 女。夫前武當亀代（戸主蒲多 3 男）。平安座尋常高等小学校を卒業す。卒業後，実家の漁業を手伝い，魚売りの仕事な

どをした。

1920 年（大正 9）3 月 29 日 24 歳のとき，夫の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，前武當ゴザアは与那城村字平安座 1180 番地に本籍のある蒲多 3 男亀代の妻で，夫の呼び寄せでハワイへ 24 歳 7 ヵ月のとき，大正 9 年 3 月 27 日に旅券が下付されている [10)]。夫とは写真による見合い結婚でハワイで結婚式をあげた。横浜港をサイベリア号で出航して，ホノルル港に着いたとき，夫が迎えに来てくれた。なお，外務省の「海外旅券下付表」によると，前武當亀代は与那城間切平安座村 1180 番地に本籍のある戸主蒲多の 3 男で，明治 20 年 8 月 10 日生，農業の目的でハワイへ，明治 40 年 1 月 22 日に沖縄県庁より旅券が下付されている [11)]。

渡航後，1920 年ハワイ島ククイハイレの十五回船キャンプのサトウキビ耕地で働いた。午前 6 時弁当をもって耕地へ出発し，キビ刈りなどの仕事をして，午後 4 時頃には帰宅した。賃金は日給 75 セントであった。1941 年同島ホノムへ移り，サトウキビ耕地で働いた。1960 年ハワイ島ペペケオのサトウキビプランテーションで働いた。1984 年以降同島ヒロ市のパウカに住んでいる。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住の決意に変わった。一世で日本国籍のままである。

兄弟姉妹は男性が 2 人，女性が 2 人で計 4 人である。子供は男性が 5 人，女性が 2 人で計 7 人である。孫は 16 人，ひ孫が 13 人いる。家屋･宅地とも自己所有である。仏壇はあり，墓地もアライ地区にある。宗教は仏教で，ホノムにある本願寺の信徒である。家庭での言語はすべて日本語を使用している。沖縄料理はよく作り，ソーメン・ウブサー・サーターアンダギーが好きである。

邦字新聞は購読していない。テレビは日本語の放送のときよく観る。同郷人団体はフイオオキナワ（ハワイ島沖縄県人会）に所属する。

模合はかつて参加したことがある。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも行った。戦後沖縄へ戦災救援物資として，教会をとおして古着などを送った。郷里への一時帰国は戦後一回ある。

（15）知花カマ

1899 年（明治 32）12 月 30 日生。ハワイ島ヒロ市で 1992 年 9 月 23 日に面接聞取。調査時 92 歳。読谷山村字波平 90 番地出身。父知花幸吉・母マカの 2 女。夫は知花幸太郎。読谷山尋常高等小学校を 5 年生で中退。母の身体が弱かったため，実家の農業の手伝いをさせられた。サトウキビ畑があり，住居はカヤブキであった。1919 年（大正 8）4 月 23 日 19 歳のとき，単身夫の呼び寄せでハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，知花カマは読谷山村字波平 90 番地に本籍のある戸主幸太郎の妻で，夫の呼び寄せでハワイへ 19 歳 3 ヵ月のとき，大正 8 年 4 月 22 日に旅券が下付されている [12)]。那覇港

を出航，神戸を経由し，横浜港を出航し 9 日間でホノルル港に着いた。自由移民でハワイへ渡航していた夫が迎えに来てくれた。

渡航後，1919 年以降ハワイ島ヒロ市郊外のパパイコウ耕地のサトウキビプランテーションで働いた。1941 年以後はハパイコウ耕地の一部であるパウカアのアールエフデーワンのサトウキビプランテーションで仕事をした。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，その後永住を決意した。1958 年 6 月 4 日にアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 2 人，女性が 3 人で計 5 人である。子供は男性が 4 人，女性が 4 人で計 8 人である。孫は 25 人，ひ孫は 18 人いる。家屋・宅地とも自己所有である。宗教はキリスト教でホーリネス教会へ通っている。仏壇はないが，墓地はアライ地区にある。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はよく作り，カンダバージューシー・アシティビチが好きで，コンブ・トウガンもよく使う。

邦字新聞は購読していない。ラジオもテレビも聞いたり観たりするのに，それほど関心がない。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。

模合は参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前正月などに送ったことはあるが，戦後はない。戦後沖縄への戦災救援物資を送ったことはない。郷里への一時帰国は戦後で，1956・75・76 年の 3 回ある。

(16) 比嘉秀幸

1901 年（明治 34）10 月 20 日生。ハワイ島ハビーで 1992 年 9 月 24 日に面接聞取。調査時 90 歳。読谷村字楚辺 (大木) 1428 番地の出身。父比嘉秀業・母カメの 2 男。妻カメ (旧姓稲嶺) は北谷村字平安山出身，戸主稲嶺盛忠の 2 女，大正 7 年ハワイ移民，父の呼び寄せによる。古堅尋常高等小学校を 4 年生で中退す。

1912 年（大正元）7 月 11 歳のとき，父の呼び寄せでハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，比嘉秀幸は中頭郡読谷山村字楚辺 1428 番地に本籍のある戸主秀業の 2 男で，父の呼び寄せとして，ハワイへ大正元年 7 月 10 日 10 歳 9 ヵ月のとき旅券が下付されている [13)]。那覇港を出航，神戸で目の検査をし，横浜港をサイベリア号で出航し 11 日間でホノルル港に着いた。沖縄では 3 食ともサツマイモで，白いごはんは節日（シチビ）のときしかでなかったが，船の食事はごはんがでた。ハワイの移民局ではほとんど検査もせず，一日で上陸できた。当時，写真結婚による呼び寄せ夫人も多かったが，検査は簡単であった。

渡航後，1912 年にハワイ島のコハラ地区のハビーのサトウキビ耕地で働いた。11 歳から 15 歳まではマホコナでサトウキビの水かけの仕事をした。その後もこのハビーで 80 年近くもの間，サトウキビプランテーションに雇われて働いた。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，戦前の段階で永住の決意をした。10 年以上も前にアメリカ国籍を取得

した。

兄弟姉妹は男性が 2 人，女性が 1 人で計 3 人である。元琉球政府行政主席の比嘉秀平とはいとこの関係にある。子供は男性が 5 人，女性が 3 人計 8 人である。孫が 15 人，ひ孫が 6 人いる。同居家族は 3 人である。家屋・宅地とも自己所有である。敷地内にサトウキビ工場跡の煙突がある。不動産としては土地を所有している。仏壇も土地もある。宗教は沖縄の祖先崇拝である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理を作り，アシティビチ（ウァーヌヒサ）が好物である。

邦字新聞は購読していない。日本語のラジオを聞き，テレビ・ビデオをよく観る。同郷人団体はコハラ沖縄県人会に所属する。毎年新年会がある。

模合は戦前に一口 5 ドル, 10 ドルのものに参加したことがある。銀行は利用していない。郷里への送金は戦前・戦後とも送ったことがない。戦後沖縄へ戦災救援物資として，県人会をとおして古着などを送ったことがある。郷里への一時帰国は 1971 年が最初で計 2 回ある。

（17）玉城亀吉

1907 年（明治 40）3 月 21 日生。ハワイ島コナで 1992 年 9 月 24 日に面接聞取。調査時 85 歳。高嶺村字大里 16 番地出身。父玉城蒲戸・母カナの 4 男。妻ツルは大正 3 年 1 月 19 日生，高嶺村字真栄里出身の賀数箸次の長女で，ハワイ二世である。高嶺尋常高等小学校を 5 年生で中退。

1919 年（大正 8）12 月 20 日 13 歳の時, 母の呼び寄せで単身ハワイへ渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，玉城亀吉は島尻郡高嶺村字大里 16 番地に本籍のある戸主蒲戸の 4 男で，母の呼び寄せとして 12 歳 9 ヵ月のとき，大正 8 年 11 月 20 日に旅券が下付されている [14)]。沖縄を出発し，神戸で目と 12 指腸虫の検査があり，横浜港を出航し，1 週間でホノルル港へ着いた。船の乗客には結婚した女性も多くみられた。移民局には母と兄が迎えに来てくれた。ホノルル港から船に乗ってハワイ島のヒロへ向かった。

渡航後，1919 年ハワイ島の北部パウハウ耕地へ行き，同地のサトウキビ耕地で 2 年間働いた。プランテーションのキビ畑での草取りの仕事で，賃金は一日 50 セントであった。1921 年 15 歳のとき，ハワイ島パウイロのサトウキビ耕地へと移り，4 年間サトウキビの切り出し（カチケン）や運搬（ハッパイコウ）の仕事をした。

1928 年 21 歳のとき，ハワイ島コナに移住し，3 年間コーヒー栽培の仕事をした。1931 年 24 歳のとき，同島ホロロアで 6 エーカーの土地をリースして，バナナやアボカドの果樹栽培をした。1941 年から 3 年間太平洋戦争中は義父の賀数箸次とコーヒーの栽培をした。戦後もコーヒーを主体にバナナ・アボカドなど果樹の多角経営の栽培をした。1991 年に引退して息子がその仕事を引き継いでいる。移民した当時は出稼ぎのつもりであったが，

戦後永住を決意した。不景気でお金の儲からない時期もあった。8 年ほど前に帰化市民としてアメリカ国籍を取得した。

兄弟姉妹は男性が 4 人，女性が 2 人で計 6 人である。外務省の「海外旅券下付表」によると, 亀吉の兄である戸主玉城蒲戸の 2 男蒲六は 20 歳 9 ヵ月のとき, 母の呼び寄せにより, 大正 8 年 2 月 26 日にハワイへ，3 男秀吉は 16 歳 11 ヵ月のとき，同様大正 8 年 4 月 12 日にハワイへ旅券が下付されている[15]。子供は男性が 1 人，女性が 2 人で計 3 人である。孫は 3 人，ひ孫は 6 人いる。仏壇はあるが，墓はない。家屋・宅地とも自己所有である。宗教は仏教で真言宗の信徒で，コナの御大師さんを拝む。家庭での言語は夫婦は日本語と沖縄方言を併用し，親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理をよく作り，アンダーギーが好きである。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイパシフィックプレス』を購読している。日本語のラジオを聞き，テレビを観る。かつては沖縄県人クラブ，日本人クラブに所属していたが，今はその組織がない。コナ農業組合に所属している。

模合には参加していない。銀行は利用する。郷里への送金は戦前は行わなかったが，戦後は行った。戦後，沖縄への戦災救援物資として品物を送った。郷里への一時帰国は 1960 年・90 年の計 2 回ある。

(18) 新川盛亀

1908 年(明治 41) 8 月 6 日生。ハワイ島パウイロで 1992 年 9 月 25 日面接聞取。調査時 84 歳。西原村字内間 266 番地出身。父新川山・母 ○○ の 3 男。父が 3 男で 2 男兄の新川康栄の養子となる。妻シゲは 6 歳年下でハワイ二世で，父は中城村字津覇出身の新垣ふっせい。西原尋常高等小学校を卒業し，高等科 1 年生のとき中退した。実家は農業で畑があり，家屋はカヤブキであった。

1923 年（大正 12）6 月 14 歳のとき，単身おじ新川康栄の呼び寄せにより，ハワイに渡航した。外務省の「海外旅券下付表」によると，新川盛亀は中頭郡西原村字内間 266 番地に本籍のある戸主亀弟康栄養子で，14 歳 7 ヵ月のとき義父の呼び寄せにより，ハワイへ大正 12 年 6 月 11 日に旅券が下付されている[16]。出発前神戸では目と 12 指腸虫の検査があったが不合格となった。その治療のため，2 週間も滞在させられた。宿泊したところは今泉旅館と記憶している。横浜港を出航してコレア号でホノルル港へ着いた。ホノルルの移民局では子供であったので，父がハワイ島のコハラから出迎えに来るまで 5 日間も留め置かれた。その時の移民局での通訳の 1 人が県出身の田島氏であった。

渡航後，1923 年ハワイ島コハラのサトウキビ耕地で，いとこと 2 人ワーターボーイとして働いた。その後コハラのハマクアで高岡グラージのメカニク（機械工）として働いた。1928 年ハワイ島パウイロへ移動し，現在まで 64 年間同地でサトウキビ栽培などの農業を

している。移民した当時から永住のつもりであった。一世で日本国籍のままである。市民権があるので不自由はしない。キビ畑など 20 エーカーの土地があるが，それは子供の名義で取得している。

兄弟姉妹は男性が 3 人，女性が 1 人で計 4 人である。子供は男性のみの 3 人である。孫が 3 人，ひ孫が 1 人いる。同居家族は 3 人である。家屋・宅地とも自己所有である。1984 年不動産として土地を約 2 万ドルで購入した。仏壇も墓地もある。宗教は仏教で浄土真宗である。家庭での言語は夫婦は日本語と英語を併用し，親子・家族は日本語を使用している。沖縄料理はよく作り，豚のスープやゴーヤーが好きである。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。英語の新聞も読んでいる。ラジオは聞かず，日本語・英語のテレビを観る。同郷人団体はハワイ沖縄県人会に所属する。同郷人がよく集まり，歌ったり踊ったり，太鼓をたたいたりして楽しんでいる。

模合は以前親睦のため，パウイロの地域で 5 ドルや 10 ドルのものに参加していた。銀行もよく利用する。郷里への送金は戦前も戦後も行った。戦後，沖縄への戦災救援物資を送ったことがある。郷里への一時帰国は，1976 年を含めて計 3 回ある。

Ⅲ．アメリカ合衆国本土・カナダにおける県系移民の現地調査（1993 年）

アメリカ合衆国本土における沖縄県系移民の調査はカリフォルニア州ロサンゼルス市で 1993 年 9 月 10 日から 16 日までの 7 日間，サンフランシスコ市で 9 月 23 日から 29 日までの 7 日間行った。また，カナダにおける県系移民の調査はレスブリッジ市で 9 月 16 日から 19 日までの 4 日間，バンクーバー市で 9 月 19 日から 23 日までの 5 日間行った。

現地調査に際し，ロサンゼルス市では北米沖縄県人会，サンフランシスコ市では北カリフォルニア沖縄県人会，レスブリッジ市ではレスブリッジ沖縄県人会，バンクーバー市ではバンクーバー沖縄県友愛会の会長はじめ，会員の皆様の全面的な協力により，県系移民の面接聞取調査および資料収集がスムーズに行えたことに対し，改めてお礼申し上げる。

現地調査の成果の概要については，前号に掲載したので，本項ではより詳細に記す[17]。以下，全行程 20 泊 21 日間をフィールド用の「調査ノート」をもとに，団体および個人としての現地面接聞取調査の実施状況を，日時を追って記述する。

①9 月 10 日（金）：那覇市から福岡・成田経由，ロサンゼルス市までの旅行日。琉球大学法文学部地理学教室の 5 人の教員（石川友紀を研究代表者に，研究分担者として中山満・島袋伸三・前門晃・石丸哲史）は出発前那覇空港国内線に集合。教室関係者の見送りをうけ，那覇空港を日本航空 922 便で出発（12 時 00 分），福岡空港国内線に到着（13 時 17 分）した。福岡空港では国際線へ移動し，同空港を日本航空 382 便で出発（14 時 13 分），成田国際空港に到着（15 時 39 分）した。成田空港を日本航空 062 便で出発（18

時 07 分），日付変更線を越えてロサンゼルス国際空港に到着（現地時間 11 時 53 分）した。ロサンゼルス空港では北米沖縄県人会会長サンキ（山城）浄次氏ほか会員の出迎えをうけ，「ニューオオタニホテル」へ直行した。ホテルで県人会役員と今後の移民調査の打ち合わせをする。午後 7 時ごろより北米沖縄県人会主催による歓迎晩餐会に出席し，約 30 人の県系人と懇談を行った。ホテル帰着 22 時ごろ。

② **9 月 11 日（土）**：ロサンゼルス市滞在，調査日。調査員各自が県人会会員の案内で，県出身移民の一世や帰米二世の自宅を訪問し，約 120 項目の質問票を兼ねた「個人面接調査票」により，テープレコーダー・カメラも使用して約 2 時間，面接聞取調査としてのインタビューを行った（以下調査方法はすべて同じ）。個人としては県系人二世金城武男氏の案内でホテルを 9 時 23 分に出発，戦前渡航一世仲田久常氏（大正 5 年生）ほか面接聞取調査を行った。ホテル帰着 22 時 22 分。

③ **9 月 12 日（日）**：ロサンゼルス市滞在，調査日。午前中個人で面接聞取調査を実施。午後団体で北米沖縄県人会舘（1501 5th Ave. LA）を訪問，会員と懇談，資料を収集する（写真 1）。ホテル帰着 21 時 07 分。

④ **9 月 13 日（月）**：ロサンゼルス市滞在，調査日。新県人会舘建設募金委員長神山修旭氏の案内で，午前中リトルトウキョウの老人施設「東京タワー」を訪問，日系人のための病院兼アパート施設内を視察，移民一世の面接聞取調査をした。午後県人一世山内昌安氏経営の「ひのいちトーフ」工場を見学した（写真 2）。

⑤ **9 月 14 日（火）**：ロサンゼルス市滞在，調査日。調査日。午前『羅府新報』社へ表敬挨

写真 1　ロサンゼルス市の（旧）北米沖縄県人会会館
（1993 年 9 月 12 日撮影）

写真 2　ロサンゼルス市の沖縄県出身移民一世の山内昌安氏経営の「ひのいちトーフ（HINOICHI）
（1993 年 9 月 13 日撮影）

**写真 3　カリフォルニア州南部の
インペリアルバレー（帝国平原）の
大平原の農地と灌漑施設**
（1993 年 9 月 15 日撮影）

**写真 4　カリフォルニア州南部
インペリアル地区の日系人の
移民資料館の展示場**
（1993 年 9 月 15 日撮影）

拶に行き，情報を収集した。戦後県人一世斎藤陽子さん（旧姓翁長）宅を夕方訪問，午後 10 時 15 分まで懇談した。

⑥ **9 月 15 日（水）**：ロサンゼルス市滞在，調査日。県人会会員の一世米国連邦政府農務省森林局地質鉱物資源調査員国吉信義氏の案内で，前夜に出発，途中サンベルニーノのモーテルで一泊して，戦前日本人移民が農業で貢献をしたカリフォルニア州南部のインペリアルバレーの大平原の現地実態調査を目指す（写真 3）。コーチャバレー，バレリージェインを経由し，大湖のソルトンシーを通過し，ソルトンシティーに到着した。インペリアル地区で歴史移民資料館として 1993 年 10 月 3 日開館予定の日系人の資料等を見学，説明を受ける（写真 4）。同館を 15 時に出発，メキシコ国境に近いアリゾナ州ヒラ砂漠の砂丘展望台に到着した。気温 40℃以上の猛暑のなか，インペリアル平原を途中休憩しながら帰路につく。ホテル帰着 23 時ごろ。

⑦ **9 月 16 日（木）**：アメリカ・ロサンゼルス市からカナダ・レスブリッジ市までの旅行日。団体としてホテルを安里氏の車で午前 10 時に出発，ロサンゼルス空港へ向かう。空港では県人会会長のサンキ氏・神山修旭氏・当銘貞夫氏の見送りを受ける。ロサンゼルス空港をエアカナダ 764 便で 13 時 25 分に出発，カナダのカルガリー空港に 15 時 53 分に到着した。乗り換えてカルガリー空港をエアカナダ 1909 便で 18 時 20 分に出発，レスブリッジ空港に 18 時 59 分に到着した。同空港ではレスブリッジ沖縄県人会会長浦崎政吉氏ほか役員の出迎えをうけた。同地は秋で気温 13℃。真冬は－ 30℃まで冷えるとのこと。県移民一世の上地安彦氏が経営する日本人レストラン「王将（O-SHO）」へ直行，戦後一世移民 10 人と夕食懇談会となった（写真 5）。「レスブリッジロッジ」ホテル到着

写真 5　レスブリッジ市で戦後移民一世
上地安彦氏経営の日本人レストラン
「王将 (O-SHO)」
（1993 年 9 月 16 日撮影）

写真 6　レスブリッジ市で戦前移民一世の
西真鶴朝計氏の奥さんとの面接聞取
調査状況
（1993 年 9 月 17 日撮影）

22 時 46 分。

⑧ 9 月 17 日（金）：レスブリッジ市滞在，調査日。県人会会長浦崎氏の案内でホテルを 9 時 06 分に出発，午前中県系一世・二世の面接聞取調査を行う。午後戦前県移民が多く住んでいたハーディービルを見学，戦前移民一世西真鶴朝計氏の奥さんを面接聞取調査した（写真 6）。夕方戦後移民一世で県人会役員金城嘉孝氏の沖縄空手道「専武舘」を見学後，自宅で面接聞取調査を行う。ホテル帰着 21 時ごろ。

⑨ 9 月 18 日（土）：レスブリッジ滞在，調査日。県移民一世金城氏・長浜氏と帰加 (カナダ) 二世ジミー大城氏の 3 人の案内で，5 人の調査員が 2 台の車に分乗，ホテルを 9 時 12 分に出発，ハーディービルを経由して，戦前の県移民の鉱山労働者の現場と居住地跡に向かう。カナディアンロッキー山脈へ近づき，バッファロークリフ，インディアンリザーブ，ビンチャンクリークを経由して，夕方炭鉱地跡に到着した。写真撮影をして帰路につく。夜レスブリッジ市到着。夕食後，ホテル帰着 22 時 30 分。

⑩ 9 月 19 日（日）：カナダ・レスブリッジ市からバンクーバー市までの旅行日。浦崎氏の案内でホテルを 9 時 40 分に出発，マウンテインビューの日本人墓地を見学する。同墓地にカナダにおける県初回移民の牧志安能・妻キヨの墓があった。ガーデンビルロッジ・老人ホーム，日本庭園を見学し，レスブリッジ空港に 11 時 25 分に到着した。空港では県人 5 家族 10 人の見送りをうける。レスブリッジ空港をエアカナダ 1904 便で 12 時 53 分発，カルガリー空港に 13 時 22 分到着。カルガリー空港をエアカナダ 183 便で 14 時 22 分発，バンクーバー空港に 14 時 23 分に到着した（時差 1 時間）。

空港ではカナダ沖縄県友愛会副会長宮城盛功氏ほかの出迎えをうけ，「シェラトン・ラ

写真 7　バンクーバ市で戦後県企業移民一世奥間健氏経営のサーモン工場
（1993 年 9 月 20 日撮影）

写真 8　バンクーバ市でカナダ沖縄県友愛会会長嘉陽宗弘氏宅での夕食懇談会
（1993 年 9 月 22 日撮影）

ンドマークホテル」に 15 時 40 分にチェックインした。高層ビルの 30 階の部屋で，市街地全体が見渡され，眺めが良かった。その後約 2 時間戦後一世移民で県人会役員の大山盛照・神里弘・具志堅興暉氏と今後の面接聞取調査の打ち合わせをした。

⑪ **9 月 20 日（月）**：バンクーバー市滞在，調査日。午前中バンクーバー市，バーナビー市で，戦後一世民の面接聞取調査を行う。午後ハイクで戦後県企業移民奥間健氏が経営するサーモン工場を視察した（写真 7）。夕方大山盛照氏宅を訪問，戦後移民の大山氏の父と両人に面接聞取調査をした。ホテル帰着 22 時 38 分。

⑫ **9 月 21 日（火）**：バンクーバー市滞在，調査日。気温 15℃。大山氏の案内でホテルを 9 時 54 分に出発，一日戦後移民の玉代勢亘氏など面接聞取調査を実施した。夕食しホテル帰着 22 時 50 分。

⑬ **9 月 22 日（水）**：バンクーバー市滞在，調査日。団体として金城嘉孝氏の案内でホテルを 9 時 10 分に出発，午前カナダ先住民のトーテム像のあるスタレー公園，サケ養殖場を見学した。その後ブリティッシュコロンビア大学の地理学教室を訪問，施設を見学する。午後バンクーバー市パウエル旧日本人街の日本語学校を視察し，職員と懇談す。近くの英国風の蒸気時計・ガス灯のある通りは観光客が多かった。夕方カナダ沖縄県友愛会会長嘉陽宗弘氏宅で同会会員と夕食懇談会となった（写真 8）。ホテル帰着 22 時 40 分。

⑭ **9 月 23 日（木）**：カナダ・バンクーバー市からアメリカ・サンフランシスコ市までの旅行日。大山氏の車でホテルを 9 時 23 分に出発，バンクーバー空港へ向かう。同空港をデルタ航空 1400 便で 11 時 43 分に出発し，ポートランド経由でサンフランシスコ空港に 14 時

33 分に到着した。空港では北カリフォルニア沖縄県人会会長新垣徳吉氏，会員酒巻裕子（旧姓翁長）さんたちの出迎えをうけた。『北米毎日』『日米時事新聞』（『日本時事』）の新聞社へ，表敬挨拶のため訪問した。その後日米文化会館で岡省三氏と面談した。宿泊先の「都（みやこ）ホテル・サンフランシスコ」に 17 時 07 分に到着した。ホテルで県人会主催の歓迎会が開かれ，多くの県人会員と 19 時 30 分より懇談した。翌日からの調査の打ち合わせを行った。

⑮ **9 月 24 日（金）**：サンフランシスコ市滞在，調査日。サンフランシスコ市郊外高級住宅が立地するサウサリート市で，戦後移民一世当銘由盛氏が経営する「すし蘭（SUSHIRAN）」を訪問，面接聞取り調査を行った。午後当銘氏の案内で周辺を見学し，サンフランシスコ市へ戻る。夜ホテルに帰着。

⑯ **9 月 25 日（土）**：サンフランシスコ市滞在，調査日。戦後移民一世の山城よし子さんの案内で，ホテルを 10 時 23 分に出発，サンフランシスコ市郊外のサニーベル市に 11 時 42 分到着，15 時 35 分まで二世のヒガシ（東）フランク氏（旧姓東江）氏の自宅で，面接聞取調査を行った。帰路スタンフォード大学を見学し，サンディアンドロ市に到着，山田八重子さんの面接聞取調査をした。ホテル帰着 18 時 40 分。

⑰ **9 月 26 日（日）**：サンフランシスコ市滞在，調査日。県人会会長新垣氏の案内で，サンフランシスコ市郊外サンノゼ市へ向かう。同市で宮城仁風会の上原松美さんに面接聞取調査を行う。アメリカ人男性を含む会員の琉球舞踊の稽古場を視察する。サンフランシスコ市へ戻り，酒巻さん宅で 20 人余の県人会会員と懇談会を行った。ホテル帰着 20 時 55 分。

⑱ **9 月 27 日（月）**：サンフランシスコ市滞在，調査日。戦後移民前里ナンシー・美代子さんの案内で，ホテルを 10 時 07 分に出発，オルナット地区に 11 時 22 分に到着す。同地の県人会員帰米二世阿嘉レイモンド・良弘氏の自宅で，半日かけて面接聞取調査を行い，移民関係資料を収集した（写真 9）。阿嘉氏宅を 19 時 30 分に出発，ホテル帰着 21 時 55 分。

⑲ **9 月 28 日（火）**：サンフランシスコ市滞在，調査日。酒巻さんの案内でホテルを出発，午前中戦前渡航の一世藤岡貞子さん（旧姓玉城，母方石川，明治 39 年生）を訪問，面接聞取調査を行った。午後前里ナンシーさんの案内で，沖縄県系移民との夕食懇談会に出席する。戦前移民の二世塚本（旧姓大工廻（ダクジャク））メリー・つる子さんと面談，自筆の本を寄贈される（写真 10）。ホテル帰着 21 時 30 分。

写真 9　サンフランシスコ市郊外オルナット地区で県人会員帰米二世阿嘉レイモンド良弘氏宅における移民関係資料収集状況
（1993 年 9 月 27 日撮影）

写真 10　サンフランシスコ市で県系移民との夕食懇談会。前に座せる女性は二世塚本（旧姓大工廻）メリー・つる子さん
（1993 年 9 月 28 日撮影）

⑳ **9 月 29 日（水）**：アメリカ・サンフランシスコ市から日本・成田空港を経由，沖縄・那覇市（那覇空港）までの旅行日。サンフランシスコ市の「都ホテル」を 10 時 11 分に出発，サンフランスコ空港に 10 時 47 分に到着した。同空港を日本航空の 001 便で 13 時 18 分に出発，日付変更線を越えて 9 月 30 日（木）成田空港に 15 時 08 分に到着した。リムジンバスで羽田空港へ移動，東京の気温 28℃。羽田空港を日本航空 909 便で 20 時 18 分に出発，那覇空港に 22 時 33 分に到着した。予定通り，アメリカ合衆国本土・カナダの北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究の一環としての現地調査，20 泊 21 日の全行程を終了した。

Ⅳ．北米県系移民現地調査における主な収集資料

1. ハワイ

①「日本帝国海外旅券」（安里永久・崎原ナベ・米須清太郎・比嘉仁亀・比嘉真勢・比嘉チル・宮城カマ）

②「渡航許可証」（比嘉真勢・比嘉チル・宮城カマ・米須清太郎）

③「居住証明願」（比嘉真勢）

④崎原貢博士論文等（「沖縄県人ハワイ移民史」「劣悪移民のすすめ」「アメリカにおける沖縄研究の状況」ほか）

⑤比嘉武信氏論文等（「沖縄県人 80 年の歩み」ほか）

⑥新川ジューン・洋子さんの論文等（「沖縄系二世移民の横顔ーパッシ・きくえ・宮平ヤング上院議員」ーほか）

⑦島福カメさん宗教関係資料（ノロ・「天宝」ほか）

図 1　沖縄県出身戦前移民一世大工廻朝信氏の
1916 年（大正 5）発行の「日本帝国海外旅券」

⑧『ハワイパシフィックプレス』邦字新聞切抜き記事（県系移民の人物紹介ほか・月刊紙）

⑨山里勇善編著（1919）『布哇之沖縄県人』実業之布哇社

⑩ハワイ報知社（1992）『アロハ年鑑ーハワイのすべてー』第 8 版，初版 1977 年発行。

⑪日布時事社（1941）『日布時事布哇年鑑』（布哇年鑑並人名住所録）

2. アメリカ合衆国本土

①「日本帝国海外旅券」（大工廻朝信）（図 1）

②「渡航許可証」（大工廻朝信）

③「外国旅券下付事実証明」（伊芸孝太郎・伊芸カメ）

④塚本（旧姓大工廻）メリー・つる子関係資料（本・系図ほか）

⑤北米沖縄クラブ（1955）『全米沖縄系人名住所録』1955 年 12 月現在（全米沖縄系人口並に職業調査ほか）

⑥北米沖縄クラブ（1958）『南加沖縄系人名住所録』1958 年 10 月現在

⑦北米沖縄クラブ（1982）『北米沖縄クラブ会員住所録』1982 年

⑧北米沖縄県人会（1990）『北米沖縄県人会会員住所録』1990 年

⑨地図（「ロサンゼルス」「サンフランシスコ」「南北アメリカ現況図」ほか）

3. カナダ

①浦崎政吉氏論文等（草稿「第一回カナダ移民・戦後」（1968 年），「沖縄からレス市近郊への一般移住及び農業研修生関係」（1968 年～ 1982 年）ほか）

②レスブリッジ沖縄県人会（1992）「レスブリッジ沖縄クラブ名簿」1992 年

③バンクーバー沖縄県友愛会（2002）『カナダ沖縄県友愛会創立 25 周年記念誌』

注

1) 拙稿（2011）「第 5 部第 5 章沖縄移民史の課題と展望」『沖縄県史』各論編第 5 巻・近代 ,pp. 463-477，沖縄県教育委員会を参照。

2）本研究プロジェクトの調査の計画・実施としての研究の目的・組織・準備状況，実施計画・方法，調査実施については，拙稿（2013）「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究－ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅰ）－」『移民研究』第 9 号，pp.41-62，沖縄移民研究センターを参照。

3）資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室（1999）『沖縄県史』資料編 8・近代 2，自由移民名簿・自 1908（明治 41）年至 1920（大正 9）年，沖縄県教育委員会，p.735 である。

4）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.82 である。

5）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.571 である。

6）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.687 である。

7）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.448 である。

8）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.185 である。

9）資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室（2005）『沖縄県史』資料編 19・近代 6，自由移民名簿, 自 1921（大正 10）年至 1925（大正 14）年, 沖縄県教育委員会, p.235 である。

10）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.707 である。

11）資料の出所は沖縄県立図書館史料編集室（1994）『沖縄県史料』近代 6，自明治 40 年至明治 44 年，移民名簿Ⅱ，沖縄県教育委員会，p.138 である。

12）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.646 である。

13）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.184 である。

14）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.687 である。

15）資料の出所は前掲注 3）と同じ，p.633 と p.647 である。

16）資料の出所は前掲注 9）と同じ，p.148 である。

17）前掲注 2）の pp.48-50 を参照。

（いしかわ　とものり　琉球大学名誉教授・人文地理学・移民学）

日本移民の本質究明

琉大北米沖縄移民調査団

1世らにアンケート実施

カナダ

琉球大学北米沖縄移民調査団（団長石川友紀教授・一行五人）が九月十六日から四日間、アルバータ州レスブリッジ市に滞在、県系人へのアンケートとフィールド調査を行った。調査に先立ち日本レストラン"王将"（上地安彦さん経営）でレス市沖縄クラブの有志らと懇談。席上石川団長から同クラブへ金一封が寄付された。

県出身移民がレスブリッジ近郊に住みついて八十四年になるが学術的移民調査が行われたのは今回が初めて。数少ない先住者一世たちも初めての移民調査ということで緊張していたが調査には極めて協力的だった。

同移民調査は一九九三年度日本政府文部省科学研究費の補助を受け、沖縄移民の調査を通して日本移民の本質究明を目的として行われたもの。

北米における沖縄出身移民の現地調査は、沖縄県民や北米各国の沖縄移民からも強い要請があり、先住者一世移民存命中の早期実施が切望されていた。

特にレス市県系人社会では存命中の戦前移住者が少なく、戦前移民の聞き取り調査も困難になり、移民関係資料の散逸が心配されていた。

アンケート調査は、戦前・戦後移住者、帰化二世の順に行った。各家庭を訪問、面談によるインタビューの形をとり、各自が所持している移民関連資料などの複写も行った。

フィールド調査では県人会組織とその歴史、議事録の閲覧、県出身移民の活躍していた地域、施設の視察、日系人墓地を訪問し県出身先住者一世たちの名前を確認した。

同調査隊は九月十日、ロサンゼルスを皮切りに調査を進め、レスブリッジは二番目の訪問地。そのあとバンクーバー、サンフランシスコを調査して九月三十日に帰沖した。

なお同北米沖縄移民調査団員名は次の通り。

琉大法文学部石川友紀教授、同中山満教授、同島袋伸三教授、教養学部門晃助教授、法文学部石丸哲史助手。（浦崎政吉・カナダ通信員）

アルバータ州レスブリッジ市マウンティーンビュー日系人墓地を調査した移民調査団＝カナダ

海外ウチナー事情

アメリカ

ロスでも移民学術調査

琉大調査団　地理学的研究で

石川友紀琉大教授を団長とする海外学術調査団一行五人が、九月十日にロス入りした。文部省科学研究補助金で北米における県出身者移民に関する地理学的研究が目的。今回は帰米二世、九十歳前後のお年寄り五十人余を調査した。

調査は昨年から始まりこれまでハワイ、マウイ、オアフで高齢者百四十人を対象に調査を終えた。北米のあとカナダ、レスブリッジ、バンクーバー、サンフランシスコで調査し九月三十日に帰った。

ロスでは県人会の主催する歓迎会が持たれ懇親を深めた。石川団長は「県人会の協力で多くの成果が得られた」と話していた。

（新垣喜久・ロサンゼルス通信員）

琉球大学北米調査隊

一行が本社を訪問

北米へ移民した沖縄県民の生活を研究調査に来米した、琉球大学北米沖縄移民調査隊（石川友紀隊長）一行五人が十四日、サンキ浄次沖縄県人会会長の案内で本社を訪れた。

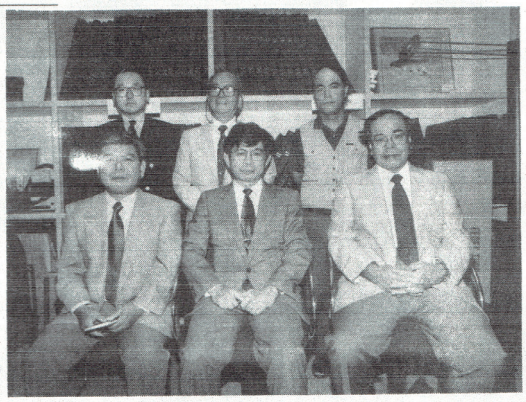
十九日から三十日までロサンゼルス、カナダのバンクーバー市、カルガリー市で沖縄県出身者と会い、その後の様子を聞く。

北米方面の調査は九二年度から始まり、今年は二回目になる。現在までに判明したことは、△予想外に元気よく働いていた△日本一の長寿県だが、それが国外でも長寿を誇っている△米国では土地に溶け込んでいる傾向などをあげていた。

一方、南米方面では一九七八年からペルー、ブラジル、ボリビア、アルゼンチンの四カ国を中心に調査が続けられている。そちらの傾向としては、△出身者が独自の経済圏を作り、一つの社会を作るまでに至っていると、調査団側は発表している。

話題になった南米から日本への日系労働者については三世、四世が日本へ行き、理解を新たにしたので祖国として見る目が違ってきた」と、好影響をあげていた。

今後も継続して調査を続け、南北両大陸に住む移民の相違性、特色をまとめたいと希望している。



前列向かって左から、島袋伸三、石川友紀（隊長）、中山満。後列左から石丸哲史、サンキ浄次県人会会長、前門晃の諸氏。

図 2　調査の状況を伝える新聞記事

左上：『琉球新報』1993 年 10 月 26 日付，右下：『羅府新報』1993 年 9 月 18 日付。